

## 「自分の命は自分で守る意識を」

校長 中川 豊 巳

最近、安全だと言われていたボストン周辺も、思いもしないような事件が発生していることは皆さんもご存知のことと思います。残念ではありますが、予期しないようなことが起こっても不思議のない時代になってきています。10月6日（土）は、本校で唯一のロックダウン訓練の日。日常の生活では起こりえないと思われる状況を想定することは、難しいと思います。誰もが、自分の命にかかわるようなことが起こるであろうなどは通常思いもしていませんし、わざわざ思いたくもありません。そのため、実際に何かが起こってしまうと、パニックを起こしてしまい、大きな惨事になってしまいます。ロックダウン訓練を通して、改めて危機管理の意識を高める機会としていただけたらと思います。

私は、日本の状況を把握するためにTVジャパンで放映されている日本のニュースを録画しておき、帰宅してから見るのが日課になっています。ある日のニュースで、東日本大震災後の大津波で九死に一生を得た宮城気仙沼の当時高校3年生の男子生徒について放映されていました。住民が撮影したもので、津波に流される屋根の上で落ちないように必死にバランスをとっている男子生徒の映像です。その屋根は、おびただしい瓦礫（がれき）とともに、沖へ流されていきました。強烈な引き波で、その男性が屋根から振り落とされそうになる緊迫した映像でした。その彼が奇跡的生還を果たし、当時のことを振り返って「油断が招いた危機」「危機を乗り越えるために必要なこと」を語っていました。

2011年3月11日、午後2時46分、激しい揺れに見舞われたとき彼は祖父母と家にいました。揺れがおさまると祖父母の安否を確認すると、祖父母は食器を片付けていたので彼は安心してしまいました。次に何かが起こるなどという想定はできず、逃げるなど思いもしませんでした。その40分後、目に映ったのは、8メートルを超える大津波。彼の中に大津波が来るであろうという想定がなかったため、つぶれて流されていく家々をあっけにとられて見ていました。大変な状況に陥り、必死に近くの家の屋根に登りましたが、その屋根ごと沖に向かって流されていきました。

落ちたら助からない！死と隣り合わせの恐怖の中で為す術もない。しかしながら、そのとき彼は、「あきらめてはいけない。何でも自分にできることをしよう。とにかく行動しよう。」と考え続けました。しばらくして、流れてきた瓦礫の中に一艘のボートが浮かんでいるのを見つけ、瓦礫の上を次々に乗り移り、何度も海に落ちながらもボートにたどり着きました。そして、ボートだけは手放してはいけないと思い、必死でしがみついていた。

試練はそれだけではありませんでした。夜になって、またも予想もしない事態が待っていました。気仙沼湾で火災が発生し、燃えている瓦礫がボートに迫ってきたのです。どこからか爆発音が聞こえ、いつ爆発に巻き込まれるか分からない究極の状況です。しかし、そのときは、彼と同じように流されていた一人の男性を彼がボートに救い上げていたため、二人で支え合い、何度も炎に巻き込まれそうになりながらも、木の棒で炎のついた瓦礫を押しつけて、なんとかその難局を乗り越えました。再び予想外の局面を経験し、その時は本当にもうダメかもしれないと思いました。沖に流されてからようやく海岸に流れ着いたのはその6時間後、夜が明けてからのことでした。

20歳になった今、彼は当時を振り返り、「もう大丈夫だろうという油断が自分の中にあったが、最悪を考えてあそこで逃げるように言うておけば、祖父母を亡くさなくてもすんだのに…」という強い後悔の念を語っていました。この生きるか死ぬかの経験を乗り越えて、彼が視聴者に伝えていたことは、「油断とか、そうだろうという甘い考えは全部捨てて、本当にこんなことがあるかもしれないという考えが必要だ。」という危機管理の意識です。これは、自分の命は自分で守るための最も基本的な考え方ではありますが、普段から意識していなければ実際に何かが起こったときに対処できるものではありません。

ぜひ、ロックダウン訓練の機会に、各ご家庭でも危機を乗り越えられるよう、様々なことを想定して話し合ってみてください。本校で、もし何かが発生した場合、教員は子どもたちを守ることに集中します。保護者の皆様には、万が一ロックダウンをしなければならぬ状況が発生したときや火災が発生したときに、ご自身で身を守っていただくかなければなりません。日頃から最悪を想定し、子どもたちの安全を最優先しながらご自身がどう避難したらよいか、この機会にお考えいただきますようお願いいたします。